

# メディア研究の挑戦

- 『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学 (2017年1月) -

佐藤 匡\*・神谷 和宏\*\*

## Challenge of Media Studies

- ULTRA Series as a subject in Tottori University (Jan.2017) -

SATOU Masashi\*・KAMIYA Kazuhiro\*\*

キーワード：ウルトラマン，怪獣，メディア，表象

Key Words: ULTRAMAN, Monster, Media, Symbol

### はじめに

本稿は、2017年1月29日に開講した『怪獣表象論講義Ⅲ～ポストモダン社会のヒエラルキー，頂点に立つものは？～』の講義内容に加筆及び修正を施した講義録である。

講師である神谷和宏氏は、現役の中学校教諭でありながら、評論等を執筆されているこの分野の第一人者である。彼と私（佐藤）との関わりについては、「メディア研究の視座－『ウルトラ』シリーズを題材として－『地域学論集《第12巻第3号》』（2016年，鳥取大学地域学部）及び「メディア研究の実践－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年2月）－『地域学論集《第13巻第1号》』（2016年，鳥取大学地域学部）に詳細に記したのでこれらを是非参照されたい。また、『怪獣表象論講義Ⅱ～『ウルトラ』シリーズから日本の“近未来”を読み解く～』の講義内容については、佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の意義－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年8月）－『地域学論集《第13巻第2号》』（2016年，鳥取大学地域学部）及び佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の手法－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年8月）－『地域学論集《第13巻第3号》』（2017年，鳥取大学地域学部）をぜひ参照されたい。

さて、『怪獣表象論講義Ⅲ～ポストモダン社会のヒエラルキー，頂点に立つものは？～』は、『怪獣表象論講義～「ウルトラ」シリーズから戦後日本を読む～』・『怪獣表象論講義Ⅱ～『ウルトラ』シリーズから日本の“近未来”を読み解く～』に続く，神谷氏の鳥取大学での講義第3弾である。この第3弾の開講は，第1弾及び第2弾の評判が非常に良かったから実現した。今回の第3弾で，一応この『怪獣表象論講義シリーズ』は完結する。

この『怪獣表象論講義シリーズ』は私にとってある意味挑戦であった。

私は一介の法律家であり，この分野の専門家ではない。ゆえに，私も1学生の身分で参加していた。私にとって神谷氏の講義はとても刺激的であり，また，とても楽しいものであった。しかし，学生を私と同様に断じていいものだろうか。ウルトラマンという作品は私にとっては子どもの頃に親しんだ作品であり，それなりに馴染みのあるものであったが，はたして，今の大学生にとっては，

---

\* 鳥取大学地域学部地域政策学科

\*\* 北海道苫小牧市立和光中学校

思い入れのある作品なのだろうか、神谷氏の講義を十分に楽しめることができるのだろうか。

この心配は杞憂に終わった。第1弾も第2弾の2日間においても、参加した学生からは「楽しかった」、「また参加したい」との感想を得ることができた。

また、参加した学生の数人は、私の研究室に所属していたり、後に私の研究室に所属したりしているが、その中には神谷氏の手法を採用し、表象論的に地域を考察する学生もいる。学生たちは神谷氏の講義から何かを掴み、そして、各々の関心のある事柄についてその手法を用い、さらにそれを地域の課題に結びつけ、卒業研究に取り組んでいる。

私の挑戦はひとまず成功したようである。

さて、この第3弾は、『怪獣表象論講義シリーズ』の最終回である。これをもって『怪獣表象論講義シリーズ』は完結する。

ここで、ひとまず、神谷氏に筆を預けることとしたい。

## 一 「生きづらさ」について考える

2017年1月29日、鳥取大学にて、『ポストモダン社会のヒエラルキー、頂点に立つものは?』という題目で講義を行った。

本講義の最終的な目的は、ポストモダン社会のヒエラルキーに目を向けることであり、そこから、私たちが日常的に共有する「生きづらさ」について考えるというものである。

近年、「生きづらさ」という言葉が様々な場面で飛び交うのが散見されるが、本来は個々に感じる生きづらさは当然に多様であり、十把一絡げにできるような事柄ではない。にもかかわらず、「生きづらさ」という曖昧で大雑把な言葉が多用されるのは、つかみどころがなく不快な通奏低音のようなものが現代社会には間断なく響いているという実感が私たちの中にあるからだろう。

そこで本講義では、その現代の「生きづらさ」の問題を照射しているといえるようなメディア作品を読み解くことで、「生きづらさ」について探求し、できるならばその解決方法を考えていくということを行った。

## 二 「生きづらさ」と「ヒエラルキー」

「生きづらさ」という掴み所がないものを探っていく手掛かりとして、第1に「ヒエラルキー」について考えることとした。

これは、社会に構築された「ヒエラルキー」の下位に置かれる大衆は、上位者が存在することによって「生きづらさ」を感じる事が当然にあり得ると考えたからである。このことは、神や自然といった超越的なものの存在を信じ、人間が自らを(神や自然という上位に位置するものに対する)下位と認識していた時代や、神の名を借りた権力者や領主が存在し、封建制度が確立していた前近代であれば、その図式を思い浮かべるのは比較的容易である。

だが、近代以降の社会においてどのような「ヒエラルキー」が構築されたのか、つまり、何が「ヒエラルキー」の頂点に君臨し、大衆の上位者として存在するのかということについては多少の考察が必要である。

近代以降、大衆を束ねる役割を担っていたものに「大きな物語」がある。

「大きな物語」とは、大衆が共通してその実現を目指す物事のことをいう<sup>1)</sup>。それは、戦中であれば戦争に勝つことが国民共有の「大きな物語」であっただろうし、戦後であれば、欧米的な価値観を取り入れて豊かさを享受することが「大きな物語」であった。

いずれにせよ、これらの状態を「大きな物語」が「ヒエラルキー」の頂点にあるという構図で考えたい。それは、かつて、神や、神の代行者としての王、あるいは封建制度下の領主が大衆を統治した構図と重なるからである。

「大きな物語」が人々を統治するというのが、前近代的な神や権力者による統治と大きく異なる点は、それが無人格な事柄が人間を統治するという点である。

しかし、この、「大きな物語」による統治も 1970 年頃を境に後退する<sup>2</sup>。この時期以降を日本におけるポストモダンということができよう。それでは「大きな物語」の代わりに、「ヒエラルキー」の頂点に立つのは何であるのか。

そのさまを『ウルトラセブン』第 43 話「第四惑星の悪夢」から読み解いていった。

『ウルトラセブン』第 43 話「第四惑星の悪夢」

脚本・上原正三 / 監督・実相寺昭雄

ウルトラ警備隊は長距離用ロケットのテスト飛行を行っていた。ロケットの自動操縦に従い、搭乗していたダンとソガの両隊員は眠っていた。やがてロケットは本来の軌道を離れ、地球そっくりの惑星に到着した。

そこは、科学発達の末、意思を持ったロボット（姿は人間と同様）が統治する国だった。また、立法、司法、行政、マスコミに至るまで国が一元的に支配し、すべてはデータ処理によって、決められていくのであった。そこでは人間は奴隷のように管理され、真に人間らしく生きようと主張するだけで、反逆罪としてとらえられ、処刑される独裁社会でもあった。

そのロボットたちの中でも、1 番の権力につくものがあり長官と呼ばれていた。

長官の飲むコーヒーを用意するのは人間の役目だ。しかし、用意されたコーヒーの砂糖の量がいつも違うとあって憤慨し、人間を殴打するのであった。

ロボットたちは軍を持ち、地球をも手中に収めようとしていたが、ダンがウルトラセブンに変身し、軍隊や、ロボットたちの都市を破壊した。

ダンとソガは、無事地球に戻った。そして 2 人で「明日の天気は？」と下駄を蹴り上げるのだった。

科学文明が発達し過ぎた末に、ロボットが人間を支配するのではないかという想像力は古くからみられた。しかし、本作から読み取れる特徴的なことは、むしろ立法、司法、行政の三権、それにマスコミまでもが一元的に支配され、すべてがデータ処理によって成されており、人間はその支配下に置かれるという点である。データ、つまり数値や合理が人間を支配するというこのエピソードに、現代社会の「生きづらさ」を生み出す要素が見られるのではないかと考えた。

数値や合理が人間の主観的な判断よりも優位に立つことで生じる弊害として、(ほとんどの) 物事を測定可能と考えてしまう点、人間特有の「さじ加減」的なことは負の側面ばかりが強調される点、また、それらが高じて画一的な価値観が蔓延すること、本来可視化する必要がないことまで可視化することや、数値化する必要がない（というよりも数値化が難しい）ことまで数値化することが起こり得る。

私（神谷）は、中学校教諭であるが、学校現場では既にそのようなことが日常的に散見され、生徒の能力（学力や体力）は何より数値化されたものが最重視され<sup>3</sup>、授業もひな型通りに行われることが求められることは大きな問題だろう<sup>4</sup>。そこでは、教諭各自の経験や独自性は、極力排除す

ることさえ求められる。また、学校経営に対しても、数値化で測られる点が多く、例えば、不登校生徒数の出現率も数値化され、教育委員会が管理職に、また管理職が一般教諭に対して、この数字をもとに指導することさえある。このことから、担任を持つ教諭は、不登校傾向のある生徒を受け持たなければならないという例もある。

教育委員会に提出する書類は膨大にあるが、あるとき、その書類に不備があったことがあった。それは、私を含め、数人の教員のミスであったのだが、その際も教育委員会は私たちを庁舎まで呼びつけ、「教育委員会を舐めているのか！」と恫喝する有り様であった。そのミスの中には「規準」と書くべきところを「基準」と書いてあったというミスがあったのだが<sup>5</sup>、このような些末な点について怒鳴る様子は、まさに先の『ウルトラセブン』『第四惑星の悪夢』のロボット長官のようであった。

このようなことは学校に特有のことではない。例えば、今では病院も格付けされ、「～に強い病院」、「手術数でわかるいい病院」等々を謳い、病院の良し悪しを数値化するような出版物やサイトも多々みられる。これらは一見、一般人が病院を選ぶ際の指標として有効であるようだが、実際には病院の良し悪しは数値で「スペック化」できるものではないだろう。だが、これらの事柄が恒常化していけば、良い評価を得たいがために、治療の難しい患者を引き取りたがらない病院が出てくるといっても、理屈としてはあり得る。

この「世界のスペック化」とでもいうべきことは、身近な例で考えても起こっており、素人による『食べログ』や『Amazon』のカスタマーレビューをもとに消費行動をとるといえることは、すでに私たちが無人格な数値によって思考や行動を規定されている例といえることができる。また、この思考や行動のあり方も、人間を画一的な存在にしていく一因となっている側面があるだろう。

数値や合理がヒエラルキーの頂点に位置付けられ、人間が画一的な存在になっていくということは、究極的には人間を抽象化させ、一記号と同様にしていく作用があると考えられる。

近代以降、人間は〈交換可能〉な存在になるべく、不揃いの姿形から、画一的な姿形へと精製されてきた存在であるともいえる<sup>6</sup>。しかし、私たちは本来、その出自、生育歴、個々の嗜好などから様々な個性を持つ。だが、交換可能性を優先しなくてはならない社会ではそれらが削ぎ落とされることで、私たちは息苦しさを感ずるのではないだろうか。

### 三 「生きづらさ」と「没個性」

次に、同一の脚本家による、『ウルトラセブン』第47話「あなたはだあれ？」を視聴した。

『ウルトラセブン』第47話「あなたはだあれ？」

脚本・上原正三 / 監督・安藤達己

ある夜、ふくろう団地に住むサラリーマンの佐藤が酔っ払って帰宅した。チャイムを鳴らすと、ドアを開け出てきたのは見慣れた妻と子ども。しかし、2人は佐藤のことを見知らぬ人と扱う。佐藤は酔っ払って遅くなった自分への当てつけだと思うが、そうではない。そして警察官に、この人は本当にあなたの奥さんかと聞かれると、次第に自信を失い、佐藤は仕方なく団地を後にする。

昼になり、佐藤の家では、主人が帰ってこない、もしや蒸発では、と心配する。

これはフック星人の仕業だった。フック星人は夜になると住民は団地ごと、地下へ埋め込み、代わりにフック星人が住民に化けて活動していたのだった。

ウルトラセブンがフック星人を倒すと、ふくろう団地は元の姿に戻る。

佐藤もようやく家族のもとへ戻るのだった。

1950年代に登場以来、団地住まいは豊かさの象徴となった。先進的で利便性のある住居が大量に安価で提供されることは、住宅不足に悩む人々から歓迎された。しかし、都市に密集し規格化された住居の中で暮らす人々からは「個」が失われていった様子がかがえる。右も左も同じ団地があり、上にも下にも同じ間取りの部屋が並ぶ、大量に量産された「箱」の中で、人1人がいなくなると、誰にも気付かれないかも知れない。そして、箱の中では住民1人1人は1住人という記号と化してしまう。「あなたはだあれ？」もまた、先の〈交換可能〉な存在に精製された人間の姿が映し出されている。

ふくろう「団地」の「佐藤さん」は利便性や効率化と引き替えに没個性を余儀なくされるサラリーマンの代表のように描かれる。スーツ姿で酔っ払って帰ってくるのを見ると、高度経済成長に資する企業戦士のようなものである。昼は激務に耐え、夜は酒を飲んで憂さ晴らしというところなのだろう。そんな彼を支えているのは恐らく家族である。社会の荒波に打たれようと、家に帰れば妻と子どもが待っている。佐藤は今夜もそんな思いで帰宅してきたのである。

しかし、彼を待ち受けていたのは、家族の喪失であった。見慣れた妻子が自分を他人扱いする。果てには、警察官から、この人本当にあなたの奥さんと言える、と聞かれ、熟考すればするほど、目の前の妻（と思っている人）は本当に昨日まで接してきた妻に間違いはないだろうか、と確信を失う。

「あなたはだあれ？」は侵略宇宙人の怖さより、規格化された都市の中では人間さえもが記号化し、果てには家族さえもが自分を忘れるかも知れないという恐れを印象づける。家族という本来、強固であるはずの最小単位の共同体さえもが、実は絶対的なものではないことを示しているかのようでもある。

今日的な日本の問題の1つとして「無縁社会」と称される問題があるが<sup>7</sup>、本来、人が密集していたはずの団地さえもが、今日では限界集落と化し、個と個のつながりが薄れ、1つ屋根の下に「無縁社会」が存在すると言われる。団地が雨後の筍のように林立したこの時代、すでに無縁社会の萌芽が生じていたことを思わせる作品であった。

#### 四 「生きづらさ」と「匿名性」

続いて、現代の生きづらさを生み出す要素として〈匿名性〉の問題について、『ウルトラマンティガ』第38話「蜃気楼の怪獣」から考えてみた。

『ウルトラマンティガ』第38話「蜃気楼の怪獣」

脚本・大西信介 / 監督・川崎郷太

最近、TPC（地球平和連合）日本支部に赴任してきた、情報局のタツムラ参謀は、自分たちの組織が、ウルトラマンティガに頼り切っているという意見の持ち主であり、TPCは軍事組織としてあまりに中途半端であると考えていた。

その頃、世間では「怪獣を見た」という目撃情報が流れていたが、その確証は得られずにいた。だがこれは、タツムラ参謀による情報操作によるものであった。

タツムラ参謀は、怪獣の脅威を取り除くためには、群衆の行動を統制することが必要であると考え、そのための試験データを収集するために、「怪獣が出た」というデマを意図的に、そして秘密裏に流していたのだ。またこのことを、TPC内の捜査部隊であるGUTSのイルマ隊長にだけ伝えた。イルマ隊長は「強制的な大衆統制をしたいのですか」「TPCもGUTSも決してミリタリズムに走ってはならない」と反論するが、タツムラは参謀という地位を利用し、イルマ隊長の反論を受け付けないうばかりか、実働部隊であるGUTSが、人々の前で調査活動をすることを命じた。デマに一層の真実みが加わるといふ効果を見込んだものであった。

なおかつ、イルマ隊長には、他の隊員にはこのことを秘密にするように命じた。

やむを得ず、命令に従うイルマ隊長であったが、現場調査に赴く隊員たちは、何の根拠もないのに大がかりな捜査を行うことで、かえって市民の不安をあおるこの調査に疑問を感じていた。隊長は真実を隠すことで、部下をあざむいていることに罪悪感があるかのようだった。

やがて、「怪獣を見た」という情報はさらに幅広く寄せられるようになった。これもタツムラ参謀が、情報拡散の範囲を広げた結果だと考えたイルマ隊長は、隊員たちに、すべては情報局が流したデマであるという真実を告げた。

その時、怪獣は本当に現れた。

怪獣との戦いの最中、イルマ隊長は「この怪獣はなぜ現れたの？愚かなことを考える人がいるから？怪獣は醜い心に誘われて生まれてくるの？」と心の中でつぶやいていた。そして、仲間を裏切ったという罪悪感から、自らの命を省みない捨て身の作戦をとろうとするが、間一髪のところウルトラマンティガに救われ、怪獣も倒されるのだった。

戦いの2日後、イルマ隊長は総監のもとを訪れ、進退伺を提出。それは「一度失った信頼は取り戻せない」という信念によるものだった。しかし、総監はイルマ隊長を引き留めるとともに、タツムラ参謀のデマの効果は薄く、人々は易々とデマに踊らされるほど愚かではないと結論づけた。

この件で失脚したタツムラ参謀とすれ違うイルマ隊長。タツムラ参謀は、自分の流したデマに関わらず、偶然怪獣が出たと思っているようだが、イルマの感触は違った。あれは偶然などではない。そして怪獣は人の心の弱さが生み出すのだと。

イルマ隊長は「愚かではないけれど、決して強くない大勢の人々を守るために」戦わなければならないと、意を新たにするのであった。

この作品で脅威となるのは怪獣ではなく、むしろ、出所のはっきりしない、匿名の情報の持つ暴力であるといえる。

作品中では、公的な組織の参謀という特権的な立場にいるタツムラという人間が匿名の情報を発したが、テクノロジーの発展した今日では、これが一般人の成せることとなった。

ただ、匿名性の暴力の問題を考えるとときに、深刻なのは、無責任なデマが人々を攪乱することももちろんだが、匿名の情報が、発信源のはっきりしている情報よりも優位に立ち、人々に影響を与える可能性があることだ。

2016年には、「保育園落ちた日本死ね」問題があった<sup>8</sup>。これが国会でも取り沙汰され、待機児童問題の深刻さが、世に問われることになったわけだが、この過激な言論は、出所がはっきりしていれば発信者がバッシングされて終わっていた可能性が高い。匿名であるがゆえに一定の影響力を持

ったという点を考えると、身元のわかる低位置の言論よりも、匿名の意見に社会が影響されるといふことになる。つまり、ここでも正体のわからないものが私たちに統御する構図が見えるのである。

ポストモダンとは、ヒエラルキーの上位に無人格な、数値や合理が君臨することを人々が押し進め、それらに自らの統御を許す時代となった。そこでは人間は交換可能な記号であることが何よりも求められる。また同様に無人格な匿名性が個人々々に対し優位に立つ時代でもある。これらが私たちを取り巻く生きづらさの側面であることを考えていく講義であった。

## 五 学生の反応

なお、学生からは以下のような意見が寄せられた（抜粋）。

- ① 何らかの課題に直面している個々が「不特定多数」を形成することによって、かなり大きな力を発揮できる可能性があるとも言えると感じる。その一方で、不特定多数が世の中を支配するという新たなかたちもできてしまっており、どのような社会を目指すべきなのか、なかなか答えが見つからないと感じています。（地域学研究科1年・木村創宇）
- ② 標準化、合理化がすべて悪いとは思わないのだが、やはりそこで失われるものは人間味であったり、人々の愛らしさであったりすると思う。私が妖怪に魅力を感じるのは、今失われつつある人間味、愛らしさを感じられるからなのかも知れない。（地域学部3年・齊藤志麻乃）
- ③ 最後に見た話（筆者注『ウルトラマンティガ』「蜃気楼の怪獣」）は、タツムラも「悪」として存在しておらず、それぞれが「正義」として働いていたと思います。「正義の対義語は正義」という言葉を思い出しました。（地域学部2年・門脇舜）
- ④ 常々から資本主義という社会システムの中でべったりしながら生きていたような感じがしていた。合理主義や、多数決という考え方をしてデジタルなものも好んで利用していてもはや資本主義に飼われているのではないかと考えている私としてはかなり頭の痛い問題だと思った。今回の作品の中で「デマを信じるほど人は愚かではない」とのセリフがあったが、残念ながら私は今の世の中はこのような言葉はもう使えないと感じ、とても悔しい気分となった。ときには噂に流されるまま、何もしていない人にさえ害を加えて責任を取ることも考えない匿名の人々が力を持った社会を生きていくことに大きな恐怖を感じている。「見えない力」に殺される恐怖との決別さえまならないという事実は、ある意味科学の限界なのではないかとすら感じられた。（地域学研究科1年・山田晃裕）
- ⑤ 何かしでかしてしまうと、匿名の大勢による暴力で99:1, 999:1と完全に社会の輪（和）からはじき出され、二度と戻れなくなっていく社会であり、またすべての人が99:1の1を尊重できる人ではないこの世の中で、世相に流されない”自己”を持ちつつ、他者の多様性を汲み取る度量を持った人間になればいいと思いました。（地域学部3年・細川瑛）
- ⑥ 多様性を認められるように努力した上で、それでも認められない場合はバッシングするのではなく、そっと目を背けることも、現代を生きる私たちにとって必要なスキルであると感じた。（地域学部4年・大橋萌）

①については、先に上げた「保育園落ちた日本死ね」問題と関わってくる。この匿名のブログ記事を取り上げた国会質問の1週間後には、2万7682人分の署名が集まったのだという。このように不特定多数の匿名の力が、何らかの問題を解決する力になることはあり得る。しかし、正体不明の言論が束ねられることで、反対に私たちの社会が苦しくなることもあることを忘れてはならないことをこの学生もよく自覚していることがうかがえる。

②については、妖怪という異形のもつ特性を研究対象としている学生ならではの意見である。本

講義のねらいも、怪獣という異形や、その怪獣に関わる人間たちという虚構を通して、現代社会で見えづらくなっている問題を読み解くということであった。この学生は、自身の妖怪研究、また、今回の講義で扱ったエピソードをそれぞれ普遍化することで、異形の出てくる物語の特性を抽出していることがうかがえる。

③は、私が『ウルトラ』シリーズを扱った講義を行う際の1つの軸としている、善悪の不安定さの問題に触れたものである。「蜃気楼の怪獣」の場合、軍拡も軍縮もともに、国民の幸福を願う正義感に裏打ちされていることがわかる。このような問題意識を持つことで、近年、賛否両論が飛び交う、集团的自衛権の行使容認、秘密保護法、共謀罪の問題等に対し、最初から片側に寄ることなく、局面を俯瞰する視野がもたれるように思う。

④は、資本主義そのものの批判ではなく、資本主義の一側面である、市場原理の重視が合理や効率を極度に擁護することがあることを批判的に捉えたものであろう。そして科学(=科学技術ではなく、科学的思考であると思われる)は、現代社会にたゆたう閉塞感を打破しきれないという、啓蒙的理性の限界を指摘するものであると考えられる。

⑤は啓蒙的理性が、少数派を排斥する暴力性を有していることから、多様性は今日の社会で保証され得ないことを指摘する中身である。そしてこの学生は、多様性を尊重するためには、世相に流されない”自己”や度量を持つ態度が求められるとしている。

⑥では、学生はもうすこし冷めた、現実的な視点を有しており、自分が認められない価値観に対しては、せめて攻撃せずに目を背けてしまう態度を保持することを勧めている。

本講義は、現代社会の生きづらさについて考え、その打破の策を問うことが目的であった。その意味では、メディアの読解を通した上で、生きづらさの問題をヒエラルキーの視座から学生とともに考えていくことは十分に達成できたと考ええる。

そして、この問題を少しでも改善していくためには、科学的な思考による方法では限界があり、むしろ個々の心構えとでもいうべきことで対処していくことに可能性があることが見出されたように思われる。

## おわりに

私(佐藤)は法律家である。法解釈においては判例というものが重要となる。判例には、法解釈の方法が示されているからである。その判例を読み込むときに、違和感のあるものもいくつか存在する。なぜ、このような解決方法を採用したのだろうか、どうしてこんな結論に至ってしまったのだろうか。法は機械でない。法は血の通った道具である。ゆえに、法を機械的に適用するのではなく、その時代の要請に即した適用というものもある。そのことを考慮せずただただ機械的に判例を読むことに意味はない。

ここで、ふと思ったことがある。神谷氏のやっていることと同じなのではないか。確かに、法という特殊技術的側面はあるが、時代背景を読み解き、その作品(判例はある意味、担当裁判官の作品であるといえるであろう)を解釈することは、同じ思考方法なのではないだろうか。

神谷氏による鳥取大学における『怪獣表象論講義シリーズ』は幕を閉じる。

今後は、また新しい形で、鳥取大学の学生に向けて楽しく、実りある講義を提供したいと現在、鋭意企画中である。

また、新たな挑戦が始まる。



## 【参考文献】

- ・ 佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の視座－『ウルトラ』シリーズを題材として－」『地域学論集《第 12 巻第 3 号》』（2016 年，鳥取大学地域学部）
- ・ 佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の実践－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学 (2016 年 2 月)－」『地域学論集《第 13 巻第 1 号》』（2016 年，鳥取大学地域学部）
- ・ 佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の意義－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学 (2016 年 8 月)－」『地域学論集《第 13 巻第 2 号》』（2016 年，鳥取大学地域学部）
- ・ 佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の手法－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学 (2016 年 8 月)－」『地域学論集《第 13 巻第 3 号》』（2017 年，鳥取大学地域学部）
- ・ 神谷 和宏『3分あれば世界は変わる』（2015 年，内外出版社）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマン「正義の哲学」』（2015 年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマンは現代日本を救えるか』（2012 年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマンと「正義」の話をしよう』（2011 年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『M78 星雲より愛をこめて』（2003 年，文芸社）

## 【注】

- 1 ジャン・フランソワ・リオタールは、近代のイデオロギーは啓蒙主義的理性により成立するという考えにたち、人々が共通してその価値観のもとに国民共有の目標実現に邁進することを「大きな物語」と呼称した。
- 2 いつをもって、人々が「大きな物語」を生きる時代が終焉したと考えるか。北田暁大は、1970 年に大阪で開催された万国博覧会を、戦後の日本のシステムが「完成」したことへの国民上げての祝祭であり、「戦後日本社会のある種の飽和点を指し示す事件」と説いている。これを「大きな物語」の〈完成〉＝〈終焉〉と見ることも可能であろう。（北田暁大『増補広告都市・東京』（2011 年，ちくま学芸文庫）185 頁参照。また、東浩紀は「高度経済成長と「政治の季節」が終わり、石油ショックと連合赤軍事件を経た七〇年代に加速した。」とする。（東浩紀『動物化するポストモダン』（2001 年，講談社新書）44 頁参照。
- 3 2007 年から文部科学省により実施されている（正しくは再開された）「全国学力学習状況調査」の都道府県別順位が公表されるようになったことで、この調査で児童生徒により良い点数を取らせるための研修が、教育委員会主催で多く行われるようになった。筆者（神谷）のこれまでの勤務地では、国語と数学の 2 教科の研修しか行われない。それは学力学習状況調査の対象教科がその 2 教科のみだからである。この研修が、2 教科で高得点を取らせ、都道府県順位を上げるための対症療法的な方策に過ぎないことを裏付けるものとなっている。また 2008 年から、同じく文部科学省により実施されている「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」対策として、「調査前にこういうストレッチをさせれば、その時だけでも良い結果が出る」といったことを教員に講義する研修も教育委員会により行われている。
- 4 授業の最初に、「課題」または「目標」の提示、授業の最後には生徒自身の言葉で本時の「まとめ」を行うことを各学校、あるいは市町村ごとに求められることが多い。教育行政も「授業の冒頭に見通しを持たせ、最後に振り返りを行うことが重要であることの理解を徹底する必要がある。」とし、さらには現状を「教師側では授業の初めに目標を示しているつもりでも、児童生徒はそう受け止めていないことが少なくない。」と批判している。（文部科学省「言語活動の検証改善の成果について」、平成 27 年 3 月 26 日教育課程企画特別部会

- において配付された資料『「言語活動の検証改善の成果」について』に加筆・修正されたもの) このことから、授業の中身以上に、この形式を踏まえているかどうかを、教育委員会や管理職から厳しくチェックされる。
- 5 民間の教育研究機関(ベネッセなど)では、評価の「基準」と「規準」を取って書き分けて、それぞれに意味を持たせており、合理的なので筆者(神谷)も取り入れた。しかし、文部科学省は「評価規準」という語は公文書内で用いても、「評価基準」という語は用いていないということが教育委員会の言い分であった。民間の発想を取り入れても良いのでは、という筆者の発言が、教育委員会の逆鱗に触れたものと思われる。
  - 6 エマニュエル・ムーニエは、近代の人間を「資本のために単なる生産手段と化した人間は匿名で非人格された「ひと」、あるいは互いに切り離された孤独な群衆の集合体=大衆となったことが強く意識された。」と説いている。(高多彬臣『エマニュエル・ムーニエ、生涯と思想—人格主義的・共同体的社会に向かって』(2005年、青弓社)) 67頁参照。
  - 7 『NHKスペシャル無縁社会 ～“無縁死”3万2千人の衝撃～』NHK, 2010年1月31日放送。後に書籍化(NHKスペシャル取材班『無縁社会』文藝春秋, 2010年)。「無縁社会」とは文字通り、人間が誰とも縁をつなくことなく果てていく状況を指した造語。
  - 8 匿名によるブログ記事。保育園に我が子を預けたい親が、預けることが叶わず、書き連ねたものと思われる。待機児童問題の深刻さを知らしめる結果となり、流行語大賞のトップテン入りを果たした。

「2017年6月2日受付, 2017年6月22日受理」